

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02280

研究課題名(和文) 未刊の日記類に見られる1750年～1850年のウィーンの音楽文化と社会の展開

研究課題名(英文) The Development of Musical Culture and Society in Vienna as Seen in Unpublished Diaries (1750-1850)

研究代表者

Gerald Groemer (GROEMER, Gerald)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：50303392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：科学研究費の研究成果となる19世紀初頭のウィーンの音楽界を分析する論文、あるいはマティアス・ペルトの日記の翻刻など計6編の学術論文を完成・発表した。今回の研究ではとくにウィーン会議の前後に行われた音楽演奏に焦点を合わせ、最初に発表した4編の論文の主題を「オペラ、ジグシュピール、バレエ」、「演奏会と教会音楽演奏」に分けて、1814年～1815年のウィーンにおける音楽文化の全体像を把握することを試みた。最後に発表した論文は1803年～1811年の日記に見られるウィーンの音楽文化に関する項を抽出・翻刻・注釈を行い、学界に新資料の提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究成果は6編の学術論文によって19世紀前半のウィーンの音楽文化の変遷を明らかにすることができた。4-5編目の論文では、マティアス・ペルトが残した日記から1803年から1811年までに催された音楽演奏、オペラ上演などに関する項目を抽出し、注釈しながら翻刻した。これにより学界に意義深い新資料を提供することができ、以降にもこの作業を続ける予定である。

研究成果の概要(英文)：For this project I examined a number of unpublished diaries and other records to understand better musical life in Vienna at the time of the Vienna Congress of 1815. I focused especially on the 58-volume diary of Mathias Perth, a functionary in the Austrian government. In his diary Perth details countless musical performances, operas, ballets, and theater taking place in Vienna during the early nineteenth century. On the basis of my research I was able to write and publish six studies (three different topics, with each piece divided into two parts), appearing in the Yamanashi Daigaku Kyoiku Gakubu Kiyo. The final two studies present transcriptions of the entries in Perth's diary treating musical life in Vienna in the years 1803-1811. During this time the author was still a young man and enthusiastically attended a large number of performances, including the premiere of Fidelio in which Beethoven himself conducted.

研究分野：音楽学

キーワード：ウィーン マティアス・ペルト 演奏会 オペラ バレエ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ウィーンが1750～1850年に経験した華やかな音楽文化の発展に関しては、すでに多くの独文、英文、和文で書かれた研究が発表されてきた。しかし、その大半は特定の作曲家、演奏家など、あるいは上流社会が支持したオーケストラ、オペラ、舞踏会などに的が絞られている。Richard Rickett 著、*Music and Musicians in Vienna* (1973年)をはじめ、Charles Osborne 著、*Schubert and his Vienna* (1985年)、David Wyn Jones 著、*Music in Eighteenth-Century Austria* (1996年)、同著、*The Symphony in Beethoven's Vienna* (2011年)など、この時代を取り上げる代表的な研究はすべてそのような性格を持つ。ただし、中流・下流社会が支持した多種多様な音楽を生み出した作曲家、演奏者、あるいは種々のジャンル、様式などの研究も1980年代以降いくぶん進んでいる。その貴重な例として Alice M. Hanson 著、*Musical Life in Biedermeier Vienna* (1985年) (喜多尾道冬、稲垣孝博共訳『音楽都市ウィーン、その黄金期の光と影』、1988年の和訳あり)、Henry-Louis de La Grange 著、*Vienne, une histoire musicale* (Paris: Fayard, 1995年)、Julia Bungardt 他編、*Wiener Musikgeschichte*, (Wien: Boehlau, 2009年)、Elisabeth Th. Fritz-Hilscher, Helmut Kretschmer 編、*Wien, Musikgeschichte* (Wien: Lit, 2011年)などがあげられる。また R. Flotzinger 編、*Oesterreichisches Musiklexikon* (全5巻、2006年完成)などでは、無数の断片的な情報が集大成されており、それを総合すれば18～19世紀ウィーンにおける諸芸能の全貌をある程度把握することが可能である。

18世紀後半まで、ウィーンの音楽文化はパリ、ローマ、ロンドンなどと比較しても、必ずしも最も優れているとは言いがたい。ところが18世紀後半以降、数多くの著名な音楽家がそれぞれの故郷・活躍地を離れてウィーンを訪れ、あるいは移り住み、この都市が世界の「音楽の都」へと発展する。これらの音楽家を支えていたのは、芸能に還元できない歴史的に変化する社会が育んだ政治的、経済的、文化的、思想的な環境である。この背景と音楽文化の形成過程との相互関係を史料に即して具体的に解明することは、従来の研究ではまだ十分に成されておらず、大変に重要な課題である。諸芸能が社会の中にどのように展開し、逆に音楽文化が社会にどのような影響を及ぼしたのかを解き明かすことにより、はじめてウィーンの音楽文化の成立と展開のプロセスが明らかにされると思われる。

以上述べた相互関係を把握するためには、日記類と見聞記が最も役立つ史料であると考えられる。なぜかといえば、日記を残した者の多くは音楽に大きな関心を抱きながらも職業的な作曲家・演奏家ではないため、プロの音楽家よりも社会をより多角的、客観的に観察したからである。「部外者」として彼らは様々な立場からあらゆる社会的現象を記し、広い視野から芸能を取り巻く環境を記録していることが大きな特徴である。また芸能史からほぼ姿を消した作曲家、演奏者、ポピュラー歌手、ダンス・ホールの経営者、大道芸人などについても貴重な情報を提供してくれる。ところが、ウィーンの音楽文化の社会的、経済的、政治的背景を物語る日記類の多くは現時点では未刊・未翻刻であり、それを芸能史の研究で活かす作業は緒についたばかりである。本研究の出発点は、このような資料を発掘、解読、翻刻する作業であった。

### 2. 研究の目的

本研究は19世紀前半に焦点を合わせ、とくにウィーン会議前後の時期までにウィーンがどのようにヨロップ音楽文化の中心地となり、この時代に具体的にどのような音楽が演奏され、どのようなオペラなどが上演されたかなどの分析を目指したものである。先行研究の多くは個別の音楽家やジャンルから出発しているのとは異なり、本研究はウィーンという「場」に着目する。そのため、ウィーンの文化的成長を広く直接経験し記録した者の未公開日記などが、分析対象となる。ことに音楽とその背後の政治的、社会的諸変化との関係を重視することで、「音楽の都」の形成をより広い視野から具体的かつ実証的に把握できる。

### 3. 研究の方法

本研究は未刊の日記類・見聞記を主な材料とし、それに即して19世紀半ばまでのウィーンの音楽文化の展開を具体的かつ実証的に解明し、ウィーンが「音楽の都」と呼ばれるほどの諸芸能の中心地に成長するまでの歴史的過程を分析することを主たる目的とする。19世紀においてウィーンでは、諸芸能の商品化と商業化が著しく進み、それにより音楽文化を育んだ者の社会的地位が急速に変化し、この変化によって新しい芸術的可能性が生み出された。この諸変化は日記・見聞記の史料に如実に反映され、資料を入念にひもとくことにより、芸術と社会の相互関係の輪郭を研究期間以内に明らかにすることが十分に可能であると考えられる。

19世紀前半のウィーンの実態を伝える最も重要な史料のひとつに、ウィーン図書館 (Wien Bibliothek) 所蔵のマティアス・ペルト (Matthias Franz Perth) の日記 (正式名称「Tage-Buch I Begebenheiten meines Lebens. 1803; Von ersten Juny bis 16. November ~ Tagebuch LVIII, 1. Juni 1855 bis 6. [19.] Februar 1856」) がある (一般公開されているが、未翻刻・未刊)。政府の役人であったペルトは、ウィーンの諸芸能のあらゆる面に深い関心を寄せ、若いころには劇作家、歌手、役者としても多少活躍した。彼は生涯を通して日記を書き続け、最終的に53冊に及ぶ1803年から1856年の年代にわたる大著を後世に残した。日記には計566点の音楽会のプログラム、演劇のピラ、サーカスなどの広告、花火大会のニュース、様々な新聞記事の切り抜きも折り込みとして張り付けられた。研究代表者はすでに平成26～28年度に行われた基盤C (一般)

の研究の遂行にあたりこの日記の一年間分（1814年～1815年）を写真撮影、解読、分析し、それに基づき2編の学術論文を作成・発表してきた。しかし、平成26～28年度に行われた研究の本題はペルトの日記の集中的な研究ではなかったため、対象の一年間のみ取り扱うだけであった。本研究では、研究代表者はまずペルトの日記の他の年代分を写真撮影、解読し、そこに記されているウィーンの音楽文化に直接的・間接的に関わる多数の項目を抽出・分析し、論文作成に活用する計画である。

ペルトの日記以外にウィーン図書館、オーストリア国立図書館、ウィーン市立文書館などには本研究に役立つと思われる未刊、未翻刻の日記類、見聞記などが他にも多数所蔵されている。また既刊の史資料としては1770年代の回顧録であるBarbara Pichler著、Zeitbilder (1839年刊)、“Arnold”という人物著、Schwachheiten der Wiener (1786年刊)、Casper Graf Sternberg著、Bemerkungen ueber Menschen und Sitten (1792年刊)、Ignatz de Luca著、Topographie von Wien (1794年刊)などがあげられ、ウィーンの音楽文化の全体像を把握するためにもっとも役立つと思われる。加えて当時の新聞記事（多くの場合はすでに電子化され、オンラインで検索することは可能である）も本研究にとって欠かせない史資料である。ペルトの日記に合わせて以上の資料を入手、解読、分析すれば、19世紀前半のウィーンの音楽文化の展開と社会との関係を総合的に明らかにすることが可能であると思われる。

#### 4．研究成果

研究代表者は3回にわたりオーストリアに飛び、ウィーン図書館所蔵のマティアス・ペルトが作成した日記の撮影と解読に取り組んだ。まずはペルトが日記を書きはじめた年（1803年）からナポレオン戦争の時代が終わり、ウィーン会議が開催された時期（1814年～1815年）まで、すなわち日記の第1巻～第22巻を対象を限定し、この年代の記録の分析を集中的に進めた。また学術論文を作成するため、ウィーン市立中央図書館（Hauptbuecherei Wien）の資料調査も行い、関連文献を撮影・蒐集し、同時に、ウィーン史専門の学者たちと意見を交換した。科学研究費の研究成果となる19世紀初頭のウィーンの音楽界を分析する論文、あるいはマティアス・ペルトの日記の翻刻など計6編の学術論文を完成・発表した。研究ではとりわけウィーン会議の前後に行われたオペラ上演と音楽演奏に焦点を合わせ、最初に発表した4編の論文の主題を「オペラ、ジングシュピール、バレエ」、「演奏会と教会音楽演奏」に分けて、1814年～1815年のウィーンにおける音楽文化の全体像を把握することを試みた。最後に発表した論文2編は1803年～1811年日記に見られるウィーンの音楽文化に関する項を抽出・翻刻・注釈を行い、新資料を提供した。

2017年に発表した論文「1814年～1815年のウィーン会議と音楽——オペラ、ジングシュピール、バレエ」（『山梨大学教育学部紀要』25巻、225頁～232頁、233頁-242頁）では、ウィーン会議に際してどのような舞台芸術が行われたのかを解析した。1814年11月1日から1815年6月はじめまで正式に開かれた会議では、ヨーロッパ各国の君主、指導者、代表者などがウィーンに集まり、長く続いた一連の戦争に終止符を打とうとした。彼らとその追従者たちはウィーンに滞在した間、ウィーンが誇る劇場において様々な歌劇、ジングシュピール、滑稽劇、パロディー、バレエなどを堪能する機会に恵まれた。

ウィーン会議に参加した各国の君主、代表者、軍幹部などとその同伴者は、主に2種類の上演を経験したと言える。そのひとつは政府が企画した豪華絢爛なイベントで、帝国がそれによって自国の経済力、政治的権力、文化的覇権力を誇示しようとしたものである。来客がシェーンブルン宮殿あるいはアウガルテンに招かれ、そこで何万本もの蠟燭に照らされたホールにおいて大々的に分かりやすい演目が上演され、その前後には豪華な晚餐などが続いた。帝都ウィーンはオーストリアのみでなく、全世界の首都であるという印象を会議参加者に与えるように、ウィーンでしか体験できないような出し物が用意された。

もうひとつは町で常日頃から運営された劇場での上演である。舞台にかけられた演目の主たる役割は、ウィーンの文化を世界にアピールするのではなく、黒字を出すためのものであった。もっともウィーン会議中であっても、外国の高位の方々のみで観客席を埋めることは不可能であり、入場券の値段を会議参加者の経済力に合わせていることにも無理があった。したがって、諸劇場の経営・監督の責任者は経営上リスクが少なく、かつウィーン市民がかねてより楽しんだ演目を舞台上に載せたため、その結果プログラムは例年と大きく変わらなかった。演目と上演様式を外国の来客に合わせてというよりは、地元ウィーンの人々の好みに従わせるという方針が採られたようである。

プロイセン国王などがいくつかのドタバタ喜劇を再三観賞した事実を考えると、この方針は決して間違っていないと思われる。貴族の演目と演奏者に対する期待と評価基準、しいて言えばその教養は劇場を訪れたウィーン市民の文化的レベルとはあまり変わらなかったと考えられる。外国人のために特別なプログラムが工夫されなかった結果、ウィーンの劇場では主にフランス人あるいはイタリア人の作曲家が作りドイツ語に訳されたオペラ・コミックが上演され続け、あるいは地元のカペルマイスターたちが作ったオペレッタや歌混じりの喜劇などが聴衆に提供された。

ウィーン会議に出席するためこの都市を訪れた外国人は、おそらくハプスブルク家が主催した歌劇・バレエの上演を高く評価し、町の劇場の数と歌劇の上演頻度の多さにも驚いたであろう。しかしウィーンが誇ったグルック、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、サリエリ、ギロ

ウェッツ等が作曲した歌劇にはそれほど接していないと考えられる。ウィーンの作曲家が残した歌劇の名作はこの時期にはむしろ他の都市で繰り返し上演され、ウィーンがやがて歌劇の分野でも「音楽の都」と言われるようになった要因はかえって外国で探さなければならないのである。

2018年に発表した論文「1814年～1815年のウィーン会議と音楽——演奏会と教会音楽演奏」(『山梨大学教育学部紀要』26巻、203頁～221頁、223頁～234頁)ではウィーン会議期間中のウィーンにおいて、どのような演奏会が開かれたのか、会議参加者がどのような音楽に触れる機会に恵まれたのかについて具体的に分析している。

この分析から明らかなように、公開コンサートでは現在「古典」と目されているモーツァルトとハイドンの名曲の演奏頻度は非常に低い。また、ベートーヴェン自身が主催した演奏会、あるいは名ヴァイオリニストのシュッパンツィクの信念が強く反映されている室内楽のコンサート以外には、当時ウィーン音楽界の唯一無二に花形であったベートーヴェンの名曲でさえ、ほとんど取りあげられていない。ベートーヴェンの作品中、会議開催中に4度も演奏され目立ったのは、『プロメテウスの創造物』という短く軽やかな序曲にすぎなかったのである。

このように見てみると、ウィーン会議を契機とするウィーンの音楽文化の豊かさと新しい発展とは、政府、教会、有名な演奏者などが主催した大規模のコンサートによってもたらされたものではないことが推測できよう。というより、ウィーンの華やかな音楽文化は膨大な人口であった素人演奏者・音楽愛好家により下から支えられていた。また音楽家としては素人であった貴族が、自ら作曲し、演奏することも、当時は決して珍しくなかった。市民階級の内からの需要によって、音楽出版社が繁昌し、楽器製作者が栄え、音楽教師という専門職が成立した。サロン・コンサートが頻繁に行われ、多くの住民を巻き込んだ合唱団が結成された。こうした展開の結果、ウィーン人の音楽に対する理解力は次第に深化し、様々な社会階級から優れた演奏家や作曲家が誕生した。素人たちはコンサートから金銭的な利を求めず、音楽自体に興味を寄せたことから、ウィーンの音楽文化がヨーロッパの他の都市と比較しても高いレベルを維持したと、19世紀前半の評論家たちは繰り返し主張している。

しかし、ウィーン会議がもたらした王政復古と宰相メッテルニヒの圧力により、市民階級は政治的な出来事から締め出され、公的な生活に関しては急速に閉塞感に襲われることとなる。この時、彼らは日常的で簡素なものに目を向けるようになった。音楽の分野では、これまでもすでに大きな役割を果たしてきた室内空間の重要性が、さらに増してゆく。しかし、やがてシュッパンツィクが好んで演奏した室内楽は、聴き手に大きく刺激を与えた創造的な「現代音楽」という相貌を失って行き、皆によく知られた「古典」と化してゆかざるを得なかった。

こうしてウィーン市民の音楽的趣味が次第に保守的になるにつれ、第一線で活躍した作曲家が発表した曲の多くは一般市民の演奏力と理解力の限界を大きく超えるようになった。音楽を演奏する者と音楽を聴く者との間の距離は増していった。しかし、素人の音楽への欲求や需要は依然として強く、それに応えるために作曲家は大量の単純で理解しやすい音楽を供給するようになった。その結果として、こうしたいわゆる「ポピュラー音楽」と「芸術音楽」との間の溝は、さらに架橋しがたく広がっていった。それとともに、「音楽の都」ウィーンの世界は複雑に絡み合う保守性と進歩性とを併存させてゆくことになる。そして、この現代においてもなお、この事情は続いているといえるのである。

2019年に発表した論文「マティアス・ペルトの日記にみられるウィーンの音楽事情(1803年～1811年)」(『山梨大学教育学部紀要』28巻、161頁～179頁、181頁～196頁)では、ウィーン在住の公務員、マティアス・ペルト(1788年～1856年)が1803年から1856年まで書き続けた未刊の日記より、1803年から1811年の音楽事情に関する項目を抜粋、翻刻し、註釈を加え、ウィーンの音楽事情を目撃者の立場から把握することを試みている。19世紀のウィーン音楽文化を知るための貴重な記録であるが、公開・翻刻されていないため、これまで音楽学の研究に使用することは困難であった。

この日記を読み解くことでウィーンの劇場などで上演されたオペラはもちろん、様々な演奏会、教会音楽、軍楽、大道芸人による演奏など、多様性が浮き彫りとなる。多種の興味深い項目の中には、特に1806年3月29日にペルトが経験したベートーヴェン自身が指揮したオペラ上演や、1809年5月31日ヨーゼフ・ハイドンの死去にともなう当時の庶民の視点などがある。また視覚障害者で女性ピアニストのマリア・テレジア・パラディスが弟子のために催した演奏会プログラムの詳細も注目し得る。そしてペルトの記述(例えば1808年5月23日項など)からはフランスのバレエをウィーンに伝えたルイ・アントワン・デュポールその他の著名なダンサーの活躍をはじめ、一世を風靡したフランス風のオペラの人気ぶりの実態も明らかにしている。ナポレオン戦争と1809年フランス軍による占領の時期と重なり、ウィーンの音楽史・文化史研究に欠かせない史料を提供している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 ジェラルド・グローマー	4. 巻 28
2. 論文標題 1814年～1815年のウィーン会議と音楽－演奏会と教会音楽演奏（正編）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 161-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ジェラルド・グローマー	4. 巻 28
2. 論文標題 1814年～1815年のウィーン会議と音楽－演奏会と教会音楽演奏（続編）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 181-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ジェラルド・グローマー	4. 巻 26
2. 論文標題 1814年～1815年のウィーン会議と音楽 - オペラ、ジグシュピール、バレエ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 203-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ジェラルド・グローマー	4. 巻 26
2. 論文標題 1814年～1815年のウィーン会議と音楽 - オペラ、ジグシュピール、バレエ（続）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 223-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----